

第5回 鶴岡市SDGs未来都市デジタル化戦略有識者会議 (会議概要)

- 日 時 令和4年2月22日 午後1時30分から
- 会 場 Zoom (オンライン会議)
- 出席委員 天野 隆興 委員、大西 宏昌 委員、大橋 康史 委員
神尾 文彦 委員、佐藤 理沙 委員、佐藤 涼子 委員
渋谷 真子 委員、渡会 俊輔 委員、渡邊 賢一 委員
- 欠席委員 渡辺 理絵 委員
- 傍聴者 5名
- 次 第 (1) 鶴岡市デジタル化戦略(案)について
(2) その他

協議事項

<デジタル実装社会について>

○座長

まずは4、5章について、意見を伺いたい。今までの有識者会議において、イメージしにくい用語について、市民の方にいかにイメージをもってもらうかがポイントとされたところ、6・7ページでウェルビーイングコミュニティ、ローカルハブの説明を加えて示している。8・9ページでは市民視点でのデジタル実装社会の姿を描き、10ページでは目指すデジタル実装社会を示している。

こういったデジタルの姿を見て、若者や学生と一緒に頑張ろうとか、鶴岡を支えていこうとか思うか、といった観点で、工夫した方がいい点などがあれば伺いたい。

○委員

学生と意見交換することが多いので、その視点から言うと、鶴岡は伝統や文化に独特なものがあり、都市としてのポテンシャルが高いとは認識しているが、学生はその中で地元で活躍できるスペースがどこにあるかということに気になっている。鶴岡のスタイルが固定されているために、学生はそれに沿わなければならない、と窮屈さを感じている。デジタルを活用し、関係人口が増えるということは、伝統を大事にしながら新しい風をどんどん入れていくということ。若い世代が新しい鶴岡を作っていくとした時、どこに入るスペースがあるのかを見える化できるといいかな、と思う。今は多くの人に対して恩恵があります、という話だが、若い人に残ってもらって活躍して欲しいなら、方針の中に若者に向けたメッセージがあるといい。

情報発信をどうするかが重要と考える。地場の企業は受け身で構えて、これが今までのスタイルだから、これでよいとしているところがあり、学生がいざ企業と話をすると、こんな面白いことがあると気づくことがよくある。デジタルの時代だからこそできる、コミュニケーションのあり方が若者に寄った、リアルな相互作用を生み出すスタイルのイベントもありと思う。携わっている人のマインドのあり方を変えるのは

重要だと思う。

○委員

一番大切なのは、作られた市民参画のプラットフォームで、その都度の課題に対して市民のみなさんが自分たちの街づくりを自分たちで考える、と積極的に参加し、ある程度自立的に動くこと。基本的に鶴岡の人は地元へ愛着がある人が多いと思うので、それができると期待したい。プラットフォームを用意し、積極的に利用をというメッセージ発信だけではなかなか難しいかと思う。学校の授業や地域の公民館の活用など、いろいろやり方があるかと思うが、デジタルに限らない部分で、多くの市民の方を巻き込んで自立的に参加してもらうことが大切かと思った。

三世帯の居住率が多いとか地域のコミュニティがしっかりしているなど、今持っている鶴岡ならではの特色を使って、多くの人を巻き込む仕組みを構築できたらいいのではないか。

○委員

電子申請についても、いきなり市に対して申請はしづらいという話も聞くので、もっと小さいコミュニティ単位からデジタルに慣れれば。今、いくつかのコミセンから、町内会長や地区会長といった方々に情報発信するのにラインワークスを使いたい、という声が聞こえ、講習をやって欲しいという話をもらったりする。町内会長や地区会長も一般市民なので、そういう方々を取り込んで利便性を実感してもらい、そこから地区住民に発信してもらう形が近道かと感じている。

この間、前年度までは紙だったある手続きが、今年度からスマホでQRコードを読み取ってできるというので実践してみたところ、非常に早くて便利と感じたが、実際ののくらい利用されたのか分からなかった。自治体の電子申請がどのくらい利用されているのか、ということ併せて載せてもらえたらと思う。

○委員

学生が就職するにあたって、みずから企業の情報をとりやすい環境を作るには、企業がやっていることをデジタルで見えるようにするというような企業の協力が必要。そこから、会社の社員に何かしらアプリ等を入れてもらい、会社の通知も簡単にできるし、市からの連絡ももらえる、通知を続ければ記憶に残り、自分にとって使えることを探してくるかと思う。全部一律ではなくて、年齢ごとに高齢者は公民館、中高年は会社、高校生は学校など変えていく必要はあると思う。

年齢ごとに何が便利かは違うと思う。市民の皆さんが常に目にするようなところに発信するのが第一歩ではないか。

→事務局

商工会議所での話では、鶴岡においては中小企業が多く、企業自体がデジタル化にどう対応すればいいのか、というのはまだこれからという状況なので、行政としてき

っちり対応していく必要があるのかなと感じる。

○委員

共創していくというコ・クリエーション、今まで繋がってなかった方と繋がることによって、新しい価値を作るというアップサイクル、もう一つはプロセスデザイン、プロセス自体に価値がある、との3つが大きい価値かと思う。この中の2つくらいのことが具体的にできたら面白いのではないか。例えば、オウンドメディアを作ってみる。国内外が鶴岡の食に関心をもっているので、鶴岡というキーワードで未来のフードデザインを一緒に考えてみようというプロジェクトを起こしてみる。鶴岡の市民と市外の方が何らかの新しい未来を作っていくプロセスを共有すると、話題も作れるし、デジタルも活用できるのではないか。

○座長

私としては、ローカルハブとウェルビーイングコミュニティが相互に連携して中長期的に、市民が鶴岡で生活してよかったと思うことが重要だと思っている。ウェルビーイングコミュニティについては、単に情報を与えるだけでなく、能動的に自らがやりたいことがデジタル化でサポートできること。ローカルハブについては、これが市民にとってどういうメリットがあるかということの事例などがあってもよかったと思う。

<先行施策について>

○座長

全体像に続き、先行活動について意見をいただきたい。まずデジタルプラットフォームにおいてデータガバナンスについてのコメントが委員からあった。誰がデータを所有し、どこまで個人情報配慮するなどをどう決めるか、というルールをしっかりとしないと砂上の楼閣になるという指摘があったが。

○委員

デジタル化戦略の基本方針のところで、鶴岡市目線から市民目線に大分表現が変わったと感じた。安心安全というキーワードから、安心して使うことができる、と表現が変わったが、データを安心して使うことができるということは、本人同意に基づいて、データを出してもらうのが大前提になると思う。だが、出してもらったデータを活用するにしても、出した側からするとどのように使っているのかわからない、データが勝手に一人歩きするのが不安だと思うので、本人が活用状況をトレースできる仕組みが必要ではないか。そういう仕組みを併せて検討すると、データの利活用がより進むのではないかと思った。

→事務局

個人情報の適正な取扱いについては、国でも指針を出しているなので、それに沿った

形での取り組みは当然必要になる。国が運営するマイナポータルでは、情報連携を行った履歴が確認できる仕組みとなっている。鶴岡市においても、市民の安心につながるなら、そのような仕組みをやっていくべきかと考えている。

→委員

国の仕組みとしてはマイナポータルで確認できると思うが、地産地消をうたって、地場でデータを活用するというのであれば、鶴岡市でも同じような仕組みが必要になるだろう。

○委員

私の仕事は大きな会社の経営企画であり、どう何千人いる社員の実行に落とし込むかを考えているが、その観点からすると、誰がいつ何をやるか、具体的にどう使うかといったところが不明瞭なのかな、と思う。今回はさらに実践を前面に出したので、誰が実践するのか、というところ。行政が実践して、と言っても市民は実践しないので、どういう仕掛けで皆さんに使ってもらうか、その仕掛けはいつ誰がするのかというところがぼやけている。全部は書けないと思うが、「実践する」と言った以上は、先行施策の最初か次のステップくらいは、いつまで誰がやって、こういう受益を期待している、それに向かって市としてこういう取組をうっていき、と書いた方がいいのではないか。それによって、うった取組の評価や分析ができるはず。今までの議論を踏まえての違和感、物足りなさはそのあたりかと思っている。

→事務局

先行施策については、これまで行ったことの紹介という位置づけであり、これしかないということではないし、先行施策なので実証を進める中で内容の変更もあるかと思う。デジタルは手段であるという位置づけから、デジタルを活用する個々の事業自体の目標を達成することがデジタル化戦略の目指すところであると考えている。

→委員

戦略はゴールを描けばいいが、実践するとか先行施策とか、計画的なところを盛り込んでしまっているのが、いいとこ取りしてしまったのかな、という印象がある。難しいところに踏み込まれたのかな、と思う。

○委員

基本的には今の意見と同じだが、計画を出す上で、具体的な目標設定が見えると市民に向けたメッセージにもなる。目標値の設定があつて、評価もできるので、計画にもう少し具体的な部分があつた方がよかつたのかな、という気はしている。

○委員

個々の施策が、中でより便利にすごせるという方面のものが多く、外から人を呼び

込む、外に向かって情報を発信する、という要素が少ないと感じている。鶴岡は雑誌のアンケートで、住みたい田舎の上位にあたり、歴史ある伝統校で中高一貫のカリキュラムを持つことが予定されていたりと、外から見て魅力的な資源が多いと思う。また、様々な会社において、どこに住んで仕事をしてもよいというメッセージが増えてきている。都市から地方へという人の流れを、鶴岡の魅力を生かして呼び込むような、外向けのメッセージがあれば、市民の皆さんも、外から人が集まって人口が増えるとか、若い人が留まってくれるなどと感じ、夢がより広がるのかなと感じた。

→座長

それを先行活動かどこかに入れた方がいいか。

→委員

全体のバランスはあると思うが、前段に地域の魅力を出すなどと織り込まれているのに、先行事例に物足りないかと思い、あった方がいいのではと感じた。ただ、何かなんでも入れて欲しいというわけではない。

農業に関しては、農業人口がどんどん少なくなり、米価の話や気候変動、鳥獣害など、農業を持続的に続けていくことが難しくなっていくなかで、どう農業を持続的に続けていくかという観点からみると、この先行施策に書いてあることは個々の施策に対する対処療法的なものになっているのかな、と感じた。

農業が持続的に継続可能か、特に若い人たちがこの業界に身を投じ、これから50年100年先もやっていけるという、夢を持てるようなビジョンが必要かと思う。デジタルで全部カバーできる話ではないと思うが。

鶴岡には元々から農業に対しての技術を磨くという土壌があり、東北一の面積と地域の資源にも恵まれている分野であるので、これが地域の活性化にも繋がると思う。

元々、農業に対しての技術を磨くという土壌がある、東北一の面積があるので、地域の資源にも恵まれている分野でもあるので、地域の活性化にも繋がる。

○委員

結局は市役所の皆さんに引っ張ってもらってデジタル化が進むと思うので、まずは市役所の皆さんがデジタル化の恩恵を受けていいのではないかと考えている。例えば、千葉県流山市で若い世代の人口が増え、子育て世帯がどんどん入っているという話を聞いた。その一つの理由が保育園の送迎バスがデジタルで一元化されているといったデジタル化の側面のようなのだが、そうすることで市役所の職員の手が空き、それならもっと地域をよくしようと考えが進み、街全体がよくなっていると聞き、鶴岡市も是非そうなってほしいと思った。

<今後のあり方について>

○座長

実際にこれを今後どうしていくのかという話に移りたい。委員からデジタル施策と

総合計画との関係のコメントがあったので、意見いただきたい。

○委員

経営とITは切り離せなくなっている。オペレーションの改革やビジネスを変えるなど、経営戦略を考える時に、デジタルをどう取り込むのかというのは不可分になっている。総合計画の実行手段としてデジタルというのは一昔前のITの見方であり、今のトレンドは、ITを使ってどう町をよくしていくか、と、総合計画の前に織り込んでいくくらいだと思うので、この順番が一方向というのは寂しいかと思った。

→事務局

総合計画とデジタル化戦略の関係性は3ページ下段に記載している。現在、令和10年までの総合計画が策定されているが、令和6年度からの後期計画での見直しが予定されている。デジタル化戦略を策定したうえで、後期計画はデジタルを考慮した形の計画を策定し、それにあわせて2年での見直しも考えている。

→委員

令和5年あたりに、どうデジタルを進めるか、どう街を変え、よくしていくかなど、一つでも二つでも、一回、進捗総括をしてみてもどうか。

○座長

今回は先行活動の提示であり、すべての領域を網羅してはいないが、人によってはその活動だけ展開すると読み取ってしまうこともあるかもしれない。戦略の構成上仕方ないところもあると思うが、前半にいろいろ書いていることを、活動のところで受け止め切れてないと思う。今後の方向性だが、提示した先行活動をさらに推進したり、こうした委員の方が確認したり、意見や改善のアイデアをいただきながら進めるという形もある。また、一つ一つの施策を具体的に推進していくために、分科会的なものを設置して、助言をいただくことも考えられるが、今後の会議の役割についての意見等をいただきたい。

○事務局

22ページにこれからの推進体制を記載させていただいた。基本的には戦略を策定した座組と同じだが、これからは戦略に基づいた活動の推進に、有識者の方々からチェックを入れてもらう、様々な助言をいただくというような形で、市のデジタル化を進めていきたい。あわせて行政だけでなく市民全体、企業などの関わりや協力も必要になってくると思うので、地域全体で推進できる座組を作っていけたら、と考えている。

○委員

今回、委員同士のディスカッションがほぼできなかった。特に実践フェーズに入ったら、1対nの会議の形式だけでなく、n対nでワーキングを分け、もうちょっとテ

一マを絞ってやってもよいかと思う。

○委員

会議では有識者の意見だけだったが、市の担当者がどう思っているのかも聞きたかった。しっかりした戦略を作るためには、今回の参加者だけでなく、若手の個人事業主のような実際にデジタルを使いそうな人たちの意見を聞き、担当者の人たちとすりあわせるのが大事ではないか。

○座長

一つ一つの取組は分科会などで確認し、それらを全体からも見るように両方がうまく組み合わさるとよい。一人では限界があるので、具体的に展開させていくうえで、何を改善し、どう進めていくかなどは、再度有識者のみなさんに意見を聞きながら、戦略を進めていければと思う。

今回、デジタル化戦略の案を提示してもらったが、委員の皆さんの貴重な意見をいただいてブラッシュアップの方向性が決まったかと思う。巻き込み方、市民と外の人との関係、情報発信、組織のあり方など多岐に渡る話だったが、可能な限り戦略に反映させていきたい。十分意見を聞けなかったところもあるかもしれないが、意見交換はここで終わらせていただきたい。皆さんからの意見を受け、戦略の修文、加筆等に関わらせてもらうが、その扱いについては座長に一任いただきたいがどうか。

(委員から賛同)

では、修文等の取り扱いは座長扱いとさせていただき、とりまとめたものは委員の方に送付させていただく。